

物故会員の追憶

今泉 信子

(会員 佐伯市臼坪町)

一昨日、佐伯史談一八二号が届いて、佐藤さんの染矢勘蔵さんと清田先生の記事を懐かしく読ませていただきました。

染矢勘蔵さんの思い出

青山小学校長に赴任した一家が市福所という集落に住みついて、そのとき連れられて行った夫の元^{もと}進^{しん}は小学校一年生の頃だったとかいいました。勘蔵さんは一級上でしたが、田舎の学校のこと複式学級で一緒に勉強した仲だったと聞いています。

昭和五十五年の史談会が行った関西旅行の節、西大分

港の待合室で勘蔵さんの方から私に声をかけてくださいました。

私は入会したばかりで、平川さんが行きませんでしたから知った人は一人もいません。顔だけは知っていますが、ものを言ったこともない人達ばかり。心細い中、そんなとき勘蔵さんが声をかけて下さって、ホッとしました。このときが初対面で色々なことを話して下さったのですよ。…それから

昭和も終りか、平成になったばかりの頃か、五月ごろ一度、藤見物にお招きいただいて出かけたことがあります。

会員の男の方は余りはつきり憶えていませんが、私と平川さん、柴富さんの三人がかたりました。柴富さんの亡くなられたのが、平成二年でしたから、まだ昭和の年代だったかもしれないね。三人でバスに乗って行ったのを憶えています。

また、こんなこともありました。その当時、堅田の南中学校に中山の次男の子が通っていました。勘蔵さんのお孫さんもそうでしたから、文化祭の折などお目にかかる機会がありました。

会場に陶芸が沢山並

べられています。見れ

ば「染矢〇〇」と名札

がついて何点もありま

すが、一人の出品だけ

です。立派な作品で

す。ちょうど勘藏さん

が見えられたので、お

尋ねましたら

「弥生の藪窯に通って

いる」とのご返事、

「学校がひけて連れて

行ってやり、作品にかかっているのを待つのは大変で

しょう」と言うと、「本人が通っているのだ」とのこと、

P.T.A.の息子さんの作品だったのです。中学生の作品展

だから、それとのみ思いこんで、P.T.A.の出品とは考え

もせず、自分一人の思いこみが、おかしくて大笑いしま

した。

そんなおつき合いがありましたのに、お葬式も知らず



昭和62年5月の珍珠研修旅行

失礼して、心が咎めております。

清田義雄先生の思い出

先生がまだお元気だったころ、今泉家の先祖「山水楽寿庵」について、いろいろと話して下さいました。うちにある楽寿庵の経緯を書いた掛軸を持って行き、解読していただいたのです。夫の話していたのを聞きかじっていたのとは、ちょっと違っていたことがわかりました。それまでも掛軸は保

管してあったのですが、戦争中のこと、何にしても生活が手一杯でそれどころではありませんが、戦中でしたから、もしそれを読むとしても漢字ばかりの漢文で、とても手に負えなかつたでしょうから。清田先生にお会いして日の目を見ることができ



角牟礼城の石垣を見学（案内は甲斐素純氏）

ました。

そして、それが一層役をしたのは、史談会の三十周年記念のとき、会場の場を埋めることができたことです。また、先生のお世話下さったのはそれだけではありません。うちに一寸まとまった和綴の本がありました。先生に見ていただいたら、佐伯文庫の中の医学書だそうです。毛利八代の殿様、高標公とご親交があったから頂戴したものが、本家から受け継いだものか、その経緯はわかりませんが二十一冊。全部揃えば三十冊だとのことです。本は保管状態が悪く、何の本というラベルも剥がていました。(無理ありません。吹浦にいたときは校宅でしたから、狭くて倉庫に入れたまま。移った灘ながさの苦木にがきは潮風があたる倉庫の中、しかも入れ物は昔の柳行李でしたから。長瀬に移って整理するとき見たら、かびまみれで何の本か全然わからなくなっていました)、結局終りには捨てましたが、医学書だけは冊数は欠けても健在だったという理由が私にも分かりません。

話は別ですが、吹浦(昭和三〇年代)のとき、友達の先生から貸してくれと言われて、何年も過ぎ戻ってきた本

が「左伝巻八」と、一枚いちまいの紙の開く側の方に印刷されていました。これもラベルが剥がれて表紙からはわかりません。正しくは「春秋左氏傳校本」第七と第八が一冊になった本でした。家に置いてあったら捨ててしまつて、一冊も残らなかつたでしょう。他の先生にお貸しして助かつた本ということになりますね。

史談会の三十周年記念の時、この医学書と掛軸と一しょに並べました。清田先生との出会いがあったからその成果ですが、もう少し早く先生との出会いがあったなら夫も正しい家系を知ることができたらうにと、今にして思っています。

後藤知久先生が合同新聞に投稿された「ふるさと再発見」という文中に安心院を訪ねたときのことを書いてあります。昭和六十二年のときでしたから、十二年前のことです。

清田先生は、そのときもう傘寿を超されていらつしゃつたのですが、院内の龍岩寺に重要文化財の薬師如来、阿弥陀如来、不動明王の(以下、55ページ下段へ)